

## シプリペディウム・レギナエの毒性

夏井高人

シプリペディウム・レギナエ (*Cypripedium reginae* Walter) は、カナダ～米国に自生するアツモリソウ属のランの一種だ。「女王 (reginae)」という名に相応しい高い草丈と優美な花をもっている。

アツモリソウ属の植物は、一般に暖地での栽培が困難とされている。しかし、レギナエは、他のアツモリソウ属植物と比較するとやや育てやすいと聞いていたこともあり、是非ともその苗を入手したいと思っていたところ、今年の春になって、Mさんが実生プラスチック苗から育てて増やした苗の分譲を受ける機会に恵まれた。非常に幸運なことだった。

早速、大きめのテラコッタ鉢に硬質鹿沼土を主体とする培養土を入れ、その中に苗を植え込んで育てることにした。すると、まもなく芽が出てきて伸びはじめ、比較的短期間に大きく成長した。とはいえ、その成長を観察しながら得ていた印象では、今年は蕾がつきそうになかった。とにかく個体を維持し、翌年につなげることが当初の目標だった。

ところが、嬉しいことには、やがて茎の頂点にゆで卵のような感じの白い蕾ができ、そして開花した。期待どおり、何とも美しく優しい印象を与える白地にピンク色の花だった。しかも、これまではアツモリソウ属のランの栽培に消極的または否定的な考えだった妻が、その花を目にしたとたんに気に入ってしまい、レギナエを含むアツモリソウ属のランの栽培に非常に協力的な人間に変化するというありがたいおまけまでつくことになった。

そのレギナエの花は、しばらくの間咲き続け、そして、花の部分だけ次第に茶色のドライフラワーのような状態となった。その後、背丈がそれ以上高くなることもなかったが、葉は少し幅広になったような気がする。そのようにして静かな状態が継続していた。

あるとき、茎や葉にコバエ (成虫) の死骸がくっついているのに気づいた。当初は、レギナエの表面に生えている毛にからめとられ、逃げられなくなっただけではないかと考えていた。レギナエの葉や茎などの表面には、曲がった毛がびっしりと生えている。しかし、

そのコバエの死骸の数がどんどん増えてくるにつれ、まるでムシトリスミレの葉にコバエの死骸が蓄積されるのと同じように感ずるようになった。そして、ある疑問が生じた。

「もしかすると、レギナエは毒草なのではないか？」

そこで、調べてみることにした。すると、米国とカナダで、レギナエの毒性について警告が出ていることが分かった。

例えば、カナダ政府の植物毒性情報提供サイト上の記述<sup>1</sup>によれば、レギナエは、過敏な人に皮膚炎を発症させる毒性があるとされ、その症状はドクキヅタ (*Rhus radicans* L.) の毒成分によるものと似ているということだ。ただし、その毒成分の化学組成などの詳細についてはまだよく判っていないらしい<sup>2</sup>。

レギナエを育て、その毒性について調べてみるまでは、ラン科植物の中に毒成分を含むものが存在するということを知らなかった。驚きだ。しかも、観察している限り、コバエのほうがレギナエに近づいてきているとしか思えないので、レギナエが何らかの誘引物質を出している可能性がある。もちろん、レギナエは食虫植物ではない。しかし、このようにして誘引したコバエなどの小さな昆虫を毛で捕らえて殺し、その死骸が腐って地上に落ち、地中に溶け込んだ栄養を使って生育している植物である可能性があることは否定できないのではないかと思う。もしこの仮説が正しいとすれば、レギナエまたはその共生菌は、動物性たんぱく質またはアミノ酸等の分解物を栄養として育てているのだろうという仮説もなりたつ。

一般に、従来、ラン科植物の毒性についてはちゃんとした研究がなされてこなかったのではないかと思う。しかし、事実として、レギナエには、何らかの毒成分が含まれている。今後、この分野について専門家による調査研究が深められることを期待したい。

---

<sup>1</sup> [http://www.cbif.gc.ca/pls/pp/ppack.info?p\\_psn=152&p\\_type=all&p\\_sci=comm&p\\_x=px](http://www.cbif.gc.ca/pls/pp/ppack.info?p_psn=152&p_type=all&p_sci=comm&p_x=px)

<sup>2</sup> [http://www.wildflower.org/plants/result.php?id\\_plant=CYRE6](http://www.wildflower.org/plants/result.php?id_plant=CYRE6)